『寺門興隆』 2002.5 第4巻第5号通巻42号 株式会社 興山舎 2002.5.1発行

2002-2-(1)

橋爪 大三郎
Hashizume Daisaburo
社会学者

1948(昭和23)年、神奈川県生まれ。東大社会学科卒、東大大学院修士課程・博士課程修了。社会学専攻。日本学術振興会奨励研究員、東工大助教授、同教授を経て現在、同大学院教授。専門は理論社会学、宗教社会学、現代アジア研究、現代社会論。主な著書『言語ゲームと社会理論』『仏教の言説戦略』『はじめての構造主義』『現代思想はいま何を考えればよいのか』『橋爪大三郎コレクション』(3巻 身体論、性空間論、制度論)『言語派社会学の原理』『世界がわかる宗教社会学入門』『政治の教室』他多数。

家庭でできる手づくりの法事

仏教は形骸化している。人びとの要求にまともにこたえていない。ずいぶん前から日本人はみなそう思っている。

もちろん、例外もある。創価学会や立正佼成会をはじめ、数多くの仏教系の新興宗教・教団が、活発に活動している。修行や研鑽にはげみ、門徒を導いたり、立派に社会的役割を果たしたりしている僧侶・住職もおられる。それでも、仏教(をはじめとする宗教)に、日本の社会が与えている地位や評価は低いし、仏教に対する人びとの関心も決して高いとは言えない。

これはとても、残念なことである。

人びとが宗教に無関心であるのには、いろいろ理由があろう。家族や身内が亡くなれば、仕方がないのでお葬式のご厄介にはなるが、ふだんは自分の家の宗旨もわからない。戒名が高いので頭に来ている。文句はいっぱいだが、それでは人間の生き死にや、この世界の成り立ちについて、自分で何か考えているかと言えば、そういうわけでもない。そして実は、仏教についてほとんどなにも知らない。よく考えたこともない。要するに、いまの仏教にも困ったものだが、日本人もほめられたものではない。どっちもどっちである。

ここで、誰が悪いのか、犯人探しをしても、始まらない。

そのかわりに、どうやれば人びとと、仏教とのよい関係がつくれるかを考えよう。

親 やきょうだい。祖父母。親しい知人。身近な死者を悼もうという気持ちは、誰にでもある。それを素直なかたちで表すことができれば、それはよいことなのである。命日や彼岸、お盆など、死者を祈念すべき折節に、家族が集まって、ささやかな死者を偲ぶ集いを持つことを提案したい。

昔はどの家にも、仏壇があった。位牌や過去帳もあった。命日ごとに、個人の戒名や俗名、享年などが記してあり、Hめくりのようにして、一日また一日と、先祖に思いをはせることができた。死者を思い、死者に感謝し、過ぎ去った世代の人びととの関係で現在と将来を考えるスタイルは、生活の一部になっていた。

3LDKのマンションは狭くて、仏壇の置き場所がない。フローリングの床は、仏壇に似合わない。日本中の家が、新建材やアルミサッシでどんどん建て替わってゆき、気がつけば、身の回りから仏壇が姿を消してしまった。仏壇と一緒に、死者の記憶や死者とのつながり、過ぎ去った世代の人びとへの関心や敬意もなくなりつつあるのではないか。

仏壇 がなくても、もちろん法事の機会はある。故人の三回忌や七回忌といった機会に、親族が集まって、亡くなった身内を偲び、残された人びとの絆を深めるのだ。都会に移り住みマンションや郊外の一戸建てで暮らすようになった大部分の日本人にとって、法事は死者と向かいあう数少ない、ほとんど唯一の、機会であると言ってよい。

けれども、私に言わせれば、法事も形式化している。まず、人数が多すぎて、互いにゆっくり話をする時間がない。つぎに、あちこちに散らばった親戚が時間をやりくりして一カ所(たいていは、お寺か、墓所にほど近いレストラン)に集まるのは、けっこうコストがかかる。第三に、僧侶に読経を頼むとしても、何を言っているのか意味がわからず、しびれをこらえてじっと我慢するだけである。せっかく集まったのに、これではもったいない。

法 事や墓参をやめてしまうことはないが、それとは別に、もっと手軽に、故人の家族や身内が集まる機会を持てばよい。

命日やお彼岸や、お盆の機会に、家族が集まって、ダイニング・テーブルを囲む。幼稚園や小学校、中学校ぐらいまでの子どもたちが、亡くなったお祖父さん、お祖母さんのために、両親や大人たちがどんなふうに思い出の言葉、追悼の気持ちを表すかを聞くのは、意味のあることなのだ。テーブルの上には小さな写真を飾り、位牌があればそれを置いてもよい。線香でなくとも、ハーブの香りの漂うキャンドルを灯してもよい。そして、簡単な式次第にのっとって、三十分ほどの追悼会を催す。

では、どんな式次第がいいだろう。

仏 教の追悼会であるからには、お経を読もう。それも、ちんぷんかんぷんの漢訳でなしに、意味のよくわかる日本語で。故人を偲ぶ追悼会にふさわしい、大事なところをピックアップして読むようにする。

つぎに、少なくとも年長者は、自分の言葉で故人への思いを語ろう。型にはまったものよりも、こういうことがあったとか、いま思えばああだったとか、気持ちを素直にのべればよい。短くていい。

心配なら下書きを用意してもいいが、なるべく見ないで話すようにする。

そのほかに、故人が好きだった音楽を流してもいい。大事にしていたものを、飾ってもいい。式次第が終わったら、そうした雰囲気のなかで、簡単に食事をしよう。故人にも席を用意して、「陰膳」のように、一緒に食卓を囲むのもいいだろう。

最 近の子どもたちは、身内の死を体験する機会がとても少なくなっている。そこで、こうした追悼会を行えば、都会にいても、お盆やお彼岸の習慣がなくなっても、亡くなった身内のために集まりをもったり、人間の生き死について考えたりするのが、ごく自然で当たり前のことになっていくだろう。そして、父親や母親や大人たちがそうしたことがらをちゃんと考えているのだなあと思い、人間はこの世界をどういう態度で生きていけばいいのかと、自分なりに考えるようになるだろう。

死者は、目にみえない。もはや存在しなくなった。そして人間は、私もあなたも、いつか存在しなくなる。この世界で大事なことは、必ずしも目にみえない。目にみえることと目に見えないことを、両方バランスよく考えることができることは、人間として大事なことではないだろうか。そして、宗教の基本ではないだろうか。

家 族でできる手作りの追悼会。昔の言い方では、法事だが、この際、どちらでもよい。それをぜひ、日本中の家族に普及させよう。これが、仏教はもちろん、あらゆる宗教に対する敬意と関心を取り戻し、人びとのあいだに健全な価値観を取り戻す早道である。もっとも身近でお金のかからないところから始めることが大切だ。

でも、どうやって? 経典を日本語で読めと言うが、どの経典のどこを読めばいいかもわからないし、式次第も思いつかない。こういう人のために、マニュアルが必要だ。マニュアルなんかなくてもできるのに越したことはないが、理屈はともかく、追悼会をやることがともかく大切。そのため私は、『家族でできる法事、追悼会』(仮題)という本を書くことに決めた。なじみのある仏典のさわりの部分を、私が思い切って、わかりやすい日本語に書き直す。故人にむける言葉のサンプルも、いく通りか載せておこう。式次第も、だいたいこんな具合というのを示しておく。そんな本なら、ああ、ちょうどこういう本が欲しかったのだと、思ってもらえるのではないか。

葬儀も法事も「おまかせ」で済ませないで、自分たちで経を読み、自分たちで儀式を執り行おう。簡単でも、心がこもっていればいい。そうやって、身近に仏教をよみがえらせることができると思うのである。

週刊読書人　第2435号　2002年（平成14年）5月3日（金曜日）

2002-2-(2)

私はなぜ小室直樹博士を尊敬するのか

オーソドックスで野心的な社会科学者

小室直樹著『日本人のためのイスラム原論』の刊行を機に

橋爪 大三郎

政治学者・評論家の小室直樹氏はこのたび刊行された『日本人のためのイスラム原論』で、幅広い学識をもとに、「これからの時代は宗教の理解なくして、世界は理解できない」として、このところ何かと話題にされることの多いイスラム教について論じている。この本の刊行を機に、小室氏を「社会科学の師」と呼ぶ社会学者の橋爪大三郎氏に、小室氏の学者としての凄さについて執筆してもらった。（編集部）

小室　直樹氏

幅広い学識

小室直樹博士の新著『日本人のためのイスラム原論』が出版された。一九三二年の生まれで、七〇歳の声を聞こうという小室博士の、旺盛な執筆活動にまず敬意を表したい。

私があちこちで、小室直樹博士を「社会科学の師」とのべているので、本書の出版を機会に編集部から原稿の依頼があった。依頼状によると、私は少数派で、むしろ≪ちょっと変わったおじさんといったイメージ≫が一般的である、そこで≪私はなぜ小室直樹を評価するのか≫を書評の枠を借りてのべてほしいという。そういうことなら、言いたいことは山ほどあるので、一も二もなく引き受けた。

最初に断っておくと、社会学者の私からみて小室博士が「社会科学の師」として尊敬すべき存在であること、一般の人びとからみて「ちょっと変わったおじさん」であることとは、なんら矛盾しない。だから私は一般の人びとに、見方を変えなさいと言うつもりはない。ただ、小室博士の著作が、ちょっと変わった「とんでも本」のつもりで読まれては困るので、どう読めばよいのかという点にしぼって話をする。

まず、奥付けの著者紹介をみること。京大数学科→阪大経済学研究科→ミシガン大学→ハーバード大学→MIT→東大大学院、といった学校（学問）遍歴が目に入るはずだ。それも、阪大では森嶋通夫（理論経済学）、ハーバードではパーソンズ（社会学・構造機能分析）、MITではサミュエルソン（理論経済学）、東大では丸山真男（政治学）、川島武宜（法社会学）、中根千枝（人類学）、そのほかに大塚久雄（経済史学）と、それこそ当代一流の学者から直かに手ほどきを受けている。だいたいこのクラスの学者になると、おいそれとゼミには入れてくれない。専門のトピックについていけないと出席を断られてしまう。必ずしも自分の専門ではない分野のゼミの場で、これらの学者と渡り合うということ自体が大変なことなのだ。

小室博士は、理系の出身なので、もっともオーソドックスなテキストを読むことから学問を始める。この点が徹底している。私は博士の蔵書をみせていただいたことがあるが、色とりどりの色鉛筆で下線や並線や囲いがつけてあり、華やかで、一目で内容がわかるようになっている。そして、大事なところはすべてそらんじてしまっている。このような勤勉で学際的な学識の幅広さが、私が小室博士を尊敬する第一の点である。

実際、これぐらいの幅の広さで学問をしている人物が、ほかに誰かいるかと考えてみたらよい。私は、一九七〇年代から八〇年代にかけて足かけ一〇年ほど、小室博士の主宰するゼミナールに席を連ねていたが、そこで経済学・解析学・代数学・位相数学・統計学・物理学・法社会学・政治学・人類学・社会学・宗教学のすべてを、小室博士ひとりから教わることができた。一人の人間が複数の学問を身につけることは、とても重要である。複数の学問の相乗効果によって、大きな生産性につながるからである。

それぞれの学問は、独自の概念、独特の発想、固有の方法をもっている。たとえば、人間の定義をあげてみよう。何を人間とよぶかは、医学、法律学、経済学ではみな異なる。法律学でも、刑法と民法ではまた違う。こうした差異は、複数の学問を学んではじめて明瞭に意識できるようになる。学問とは何かというメタ知識が、駆使できるようになる。それぞれの学問の限界を踏まえ、それらを自在に道具として使いこなすことができるようになるのは、それからだ。たった一つの専門しか知らない学者は概して信用できないし、有用な知識を生み出すはずもないと、私は勝手に思っている。

独創的な考察

第二に小室博士は、もっともオーソドックスな学説の、核となる命題から出発する。決して奇をてらったところはない。ウェーバーの世俗内禁欲。デュルケームのアノミー（無規範）。リカルドの比較生産費説。マルクスの産業予備軍説。ワルラス〜ヒックス〜サミュエルソンの一般均衡理論、などなど。それらは、数学の公理のように、小室博士の立論の前提に置かれている。そしてそれらを縦横無尽に組み合わせ、確実な推論の筋道を通って、さまざまな命題が定理のように導き出されていく。

第三に小室博士は、現代社会のかかえる中心的で困難な問題に、誰よりも果敢に取り組んできた。たとえば、『ソビエト帝国の崩壊』（一九八〇）である。ソ連が崩壊するとは誰も本気で予想しなかった当時、小室博士は公表された資料と、マルクスやウェーバーやデュルケームの学説、独自の社会学的な洞察を組み合わせることだけから、その解体を予言した。しかも、解体の原因やプロセスも、現実を先取りするものだった。これだけでも大変な業績と言えよう。

小室博士の学問的バックグラウンドと業績については、副島隆彦＋橋爪大三郎『小室直樹の学問と思想』（一九九二年、弓立社）に詳しいので、参照していただきたい。

さて、今回の『イスラム原論』も、以上の三つの特徴をよく表している。この書物の基本は、キリスト教とイスラム教の比較研究である。ウェーバーの比較宗教社会学が踏まえられているのは、小室博士がのべている通り。だがそこに、イスラム法学の考察やアメリカ社会の分析、日本社会の特性論（天台本覚論）などが加わって、類書にない独創的な考察が多く導かれている。

小室博士は執筆にあたって、鉛筆を何本も削り、机に原稿用紙をつみ重ねて、棟方志功のような気迫でマス目を埋めていく。行替えが多いその文体は、語り言葉（講談調）が基調である。語り言葉の特徴は、同じ趣旨のことがらを反復し、聞き手の無意識にメッセージを浸透させていくことだ。私は小室博士のゼミを毎年聴講していたので、反復の重要性が身に沁みている。小室博士の著作は、少しずつ互いに似ているが、それはゼミの講義の語りの文体に通じるもので、じんわりとした教育効果を期待できるのだ。

小室博士の仕事は、いっぽうで近代に対する畏敬に満ち、もういっぽうで日本という非西欧社会に生まれた宿命とどこまでも対峙していくという気迫に満ちている。近代がどれだけ日本社会と違いか、そして人為的な制度であるかを、小室博士ほど切迫感と説得力をもって語る著者は少ない。それは、敗戦期に人格を形成した小室博士の世代の共通体験を踏まえている。小室博士のスタンスこそ、戦後日本が目を背けようとしてきた原点を衝くものであり、経済的繁栄の裏にひそむ構造的弱点を明るみに出すものだ。小室博士が≪変なおじさん≫にしか見えない人は、自分も≪変なおじさん≫と言われることを覚悟しなければならない。（はしずめ・だいさぶろう氏＝東京工業大学教授・社会学専攻）

46判・447頁・1600円
集英社インターナショナル発行
集英社発売
4-7976-7056-8

★橋爪大三郎氏お薦めの小室直樹氏の本5冊

◇『ソビエト帝国の崩壊』（カッパブックス）
◇『危機の構造』（中公文庫）
◇山本七平『勤勉の哲学』（PHP文庫）解説〜品切れ
◇「構造―機能分析の論理と方法」『講座社会学1理論社会学』所収（東京大学出版会）
◇『新戦争論』（カッパブックス）

2002 - 2 - ③

高2講座『encollege』小論文 2002.6（株）ベネッセコーポレーション p30-31 2002.6.1発行

私は「教育」からこう考える

ここに教育についての一つの意見を提示したい。
きみはここから何を考えるか。自分の意見を引き出してみよう。

まず、なぜ勉強するかについてお話しします。

勉強は時間とエネルギー、注意力、集中力を使って、情報を将来生きるために自分の体の中に変換しているんです。今は情報化時代で、情報は膨大に図書館やネットワークなどさまざまなところにありますが、本当に大切なのは自分の頭のなかにどれだけの情報があるか。自分の頭の中にないのなら情報のあるところへ取りにいかないといけませんが、それには時間がかかります。もともと頭の中に情報がある人にはかないませんね。だから、基本的なことを正確に、頭の中に入れて自分のものにしておくことが大切なのです。それが普通教育なんですよ。たとえば"四面楚歌"を学校で習いますよね。分からなければ辞書を引けばいいというのでは意味がなくて、使い方や意味が自分の頭の中に入っていてはじめて意味があるのです。だから、高校までは誰もが頭の中に入れないといけないものを学ぶのです。入れないと損をしますよ。入れても得はしないけど、入れないと損をします。

入れて得をするのは自分だけの特別メニューです。みんなが勉強しないことを、自分で勉強しておけば得をします。それも大事。損をしないで得をすれば幸せになれます。人と違うことによってみんな得をしているのですから、世の中助け合いです。みんな違うことをやっているから社会が成り立っているんですよ。自分の得意を伸ばすのは競争ではありません。みんなが幸せになる方法論なんです。

ただ今の教育は、それがなかなかうまくいかない。高校時代が終わり、それから先みんな違うことをやる段階になって逆に自分の方向を見失い、切り替えができないで困ることが多いのです。そうならないためには、普段から人と違うことにプライドを持つことが大切です。自分は友だちと違ったところがいくつあるか数えてみる。もしなければ、自分独自の勉強や経験から作ればいい。なんでも、やろうとする気持ちが大切です。

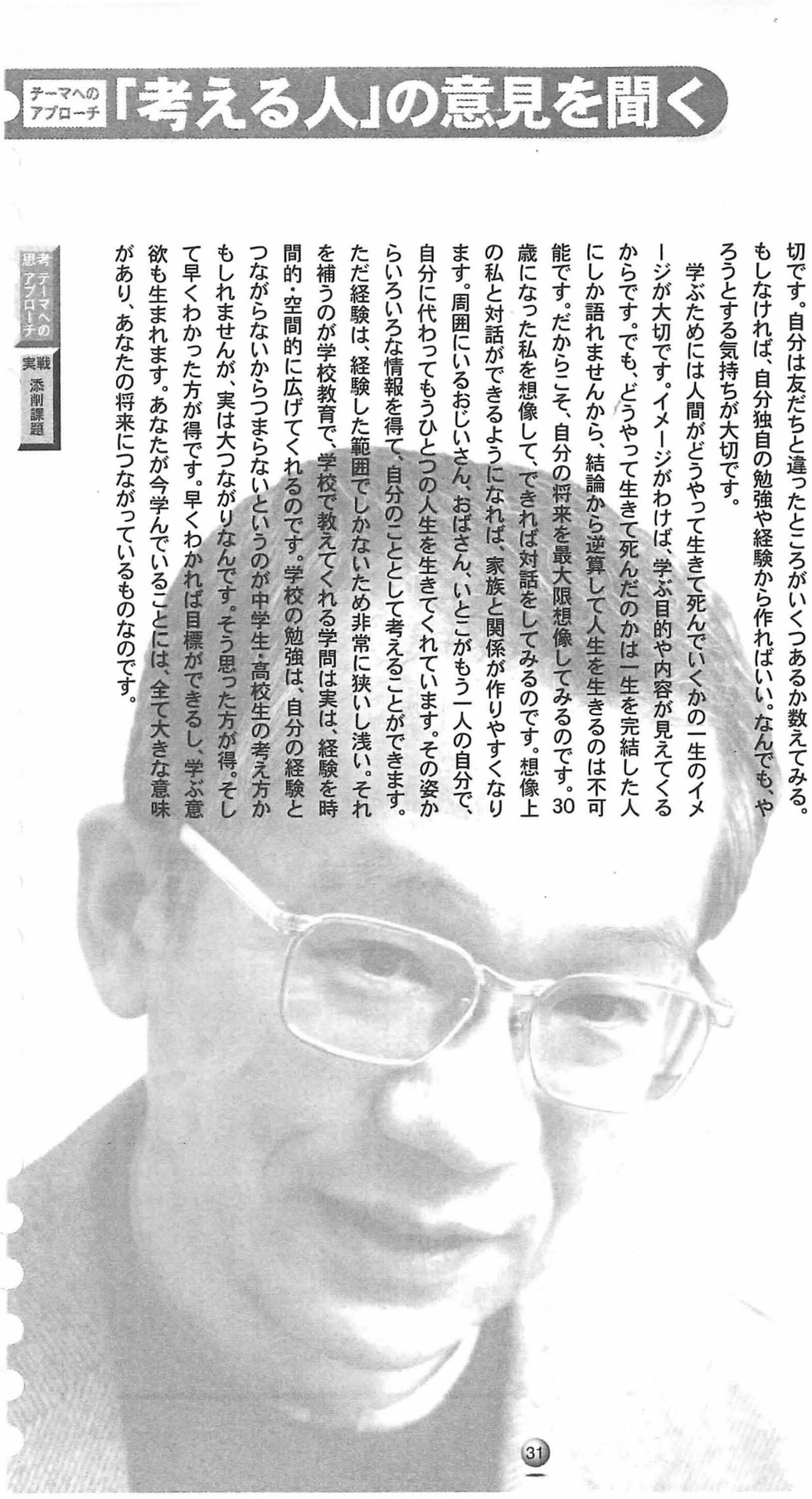
学ぶためには人間がどうやって生きて死んでいくかの一生のイメージが大切です。イメージがわけば、学ぶ目的や内容が見えてくるからです。でも、どうやって生きて死んだのかは一生を完結した人にしか語れませんから、結論から逆算して人生を生きるのは不可能です。だからこそ、自分の将来を最大限想像してみるのです。30歳になった私を想像して、できれば対話をしてみるのです。想像上の私と対話ができるようになれば、家族と関係が作りやすくなります。周囲にいるおじいさん、おばさん、いとこがもう一人の自分で、自分に代わってもうひとつの人生を生きてくれています。その姿からいろいろな情報を得て、自分のこととして考えることができます。ただ経験は、経験した範囲でしかないため非常に狭いし浅い。それを補うのが学校教育で、学校で教えてくれる学問は実は、経験を時間的・空間的に広げてくれるのです。学校の勉強は、自分の経験とつながらないからつまらないというのが中学生・高校生の考え方かもしれませんが、実は大つながりなんです。そう思った方が得。そして早くわかった方が得です。早くわかれば目標ができるし、学ぶ意欲も生まれます。あなたが今学んでいることには、全て大きな意味があり、あなたの将来につながっているものなのです。

「考えの履歴書」

親から「自分だけが理由もなく特別扱いをされるのは間違いだ」ということを教わったことが、私の教育を考える原点です。実際に通った公立の小学校にはさまざまな家庭環境の人がいました。みんなが違うことが当たり前に感じられました。今は社会的な背景が同じになっている分、人と違うことが苦しい世の中になっていますね。またパラサイト・シングル*のように自分で努力をしないでも、何でも与えられる世の中になっていますね。

学校にいるとみんながやるのだったら自分もやる、みんなが食べるのだったら自分も食べなければなりません。これが「自分だけが理由もなく特別扱いされるのは間違いだ」ということです。道徳性の基本です。これを身につけるのも学校教育です。この基本を身につけたうえで、つぎに、自分だけのオリジナルなことをやっていく。この順番がとても大切なんです。これが逆になると、単なる「わがまま」が育つだけですね。

*「パラサイト・シングル」…学業を終え、場合によっては就職してからも親と同居し、経済的に依存している未婚の成人のこと。（『イミダス』より）



橋爪大三郎（はしづめだいさぶろう）

1948年神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。現在、東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。『選択・責任・連帯の教育改革【完全版】』『言語派社会学の原理』など、著書多数。最新刊として、『その先の日本国へ』。教育問題から政治、経済、国際問題にいたるまで、さまざまな分野にわたる見解を発信している。

『春秋』No.440　株式会社　春秋社　p37-39　2002.6.25発行
追悼●平川彰

2002-2-(4)

仏教をめぐる社会学的想像力

――平川彰博士の業績によせて

橋爪大三郎

あるとき、もうずいぶん昔に、仏教について研究しなければと考えた。『仏教の言説戦略』という本を書こうと、タイトルまで決めてしまった。

大それたことである。なぜそんなことを考えたのか、思い出してみる。

大学院生のころ、構造主義や記号学や現代思想を勉強していて、なんだこれは、みんなキリスト教を下敷きにした話ではないかと思った。キリスト教にしかあてはまらないのでは、普遍的な議論とはとても言えない。自分が議論を組み立てるときには、キリスト教となるべく関係のない、たとえば仏教にもあてはまるようにしよう。

だから仏教のことは、頭のすみにずっとひっかかっていた。そんなとき、運よく仏教の専門家と知り合った。東方学院で中村元博士のもとにおられた、保坂俊司氏である。仏教のイロハから研究の進みぐあい、読むべき本や資料などについて矢継ぎばやに質問する私に、保坂氏は丁寧に答えてくれた。そして、中村元博士の業績はもちろんとして、平川彰博士の著作もぜひ参照するようにと勧めてくれた。

こうして私は、平川博士の『原始仏教の研究』『律蔵の研究』『初期大乗仏教の研究』『インド仏教史』などをつぎつぎ読むことになり、そこから多くのインスピレーションを受けとることができた。

それは、平川彰博士の仕事が、社会学的な想像力に満ちていたからではないかと思う。

中村元博士の業績は、言うまでもなく世界的に第一級の水準のものだが、西欧、インド、日本、中国のみならず、全世界の哲学的思索を縦横に参照する比較思想を本領とする。そのほかの大家の著作も、仏教経典のテキストを精査し、原義に分け入り、仏教思想の本来の姿を再構成しようという動機にもとづいている。これらは、仏教を理解するうえで、大事なことである。けれども、そんななかで、平川彰博士の仕事だけが、仏教を生み出した人びとがどのような集団を営んでいたのか、どのような人びとがそれを経済的に支えていたのかなど、当時の社会状況に大きな関心を払っていた。そして、私の興味もそこにあったのである。

私は、平川彰博士のふたつの仕事からインパクトを受けた。ひとつは、サンガと戒律の研究。もうひとつは、大乗仏教の仏塔信仰起源説である。

まず、戒律。経蔵や論蔵が豊富な思想的内容を含み、つねに論争の的となるのに対して、律蔵は分量も少なく無味乾燥である。だから、あまり研究されてこなかった（のだろうと思う）。けれども、仏教の原点はサンガの出家修行にあり、そのサンガを組織するルールこそが律蔵なのだ。当時のサンガは消え失せたが、律蔵はテキストのかたちで、今日に伝わっている。

残されたテキストは、スルメの干物のようなもの。スルメから泳いでいるイカを復元できれば、社会集団としての仏教の姿がみえてくる。平川博士は、サンガ集団の特異な構造――ギルドの一種と考えられる――を、丹念に明らかにしていく。界（現前サンガに対応するテリトリー）、羯磨（ケツマ）（サンガの全体集会）、戒（修行者の守るルール）／律（サンガの集団規律）などによって、完全に対等で自由な修行者が集まった集団という、サンガの基本的な性格が浮かびあがる。これは、仏教のオリジナルなかたちを理解するのに、欠かせない前提なのだ。

サンガ集団で、強制は意味をもたない。修行は自発的なものだからだ。この点は、キリスト教の場合と対照的である。たとえば大妄語戒。覚っていないのに覚ったと公言する罪だが、だれがそれを確認するのか。律蔵をよく読むと、本人が嘘だと認めた場合に成立するとなっている。サンガの戒律は、巧妙に構成されている。私はこれを踏まえ、覚りをめぐる五重の言語ゲームとして初期仏教を再構成できたし、オウム真理教の解明にも役立った。

つぎに、大乗仏教。平川博士は、大乗経典を残した人びとが、サンガ集団と無関係に、在家修行者としてどのような社会基盤のうえに生活していたのだろうと、疑問に思った。小乗経も大乗経も釈尊一人が説いたと信じられた中国や日本では、意識にのぼらなかった問題である。そして経典のなかのこまかな記述や遺跡の考察から、サンガ集団と無関係に起こった仏塔信仰が、大乗教団の出発点だったという仮説に達する。中国では仏塔は寺院の配置のなかに取り入れられているが、インドでは異なる。さまざまな懸案を一度に解決する、みごとな仮説だと思う。

この大乗仏教＝仏塔信仰起源説を下敷きにすると、大乗経典の相互関係がすっきり理解できる。般若経典をうみだした般若教団を原点に、浄土教団、法華教団、華厳教団、さらに密教のグループ。それぞれが独自のアイデアを擁して、競合し、影響しあいながら、インド社会の人びとに訴えようとした。中国に伝わって体系化される以前の、多元的な世界がそこにある。

初期仏教についてのこうしたスケッチは、中国や日本では考えられたことがなかった。サンガ集団から切り離されたテキストだけが伝来し、まったく別の社会的文脈に埋め込まれ、しか

もそのことが気づかれなかったからである。仏教の本来の姿を復元するには、仏典を読み解く作業と並んで、こうした社会学的想像力が重要になると思う。

私が読んだのは、平川彰博士の仕事の全体のうち、ごく一部分にすぎない。それでもこれが、世界一級の達成であることは疑いないと思った。

平川彰博士の業績は、仏教の全貌を、非仏教圏の人びとに紹介しようとする場合、不可欠のものではないだろうか。仏教の経典は膨大で、互いに矛盾する内容を含み、要約するのが困難だ。コーランや聖書のような一神教のテキストの一貫性はもちろん、儒教の経典（十三経）程度の整合性もそなわっていない。それは仏教が、思想の自由を制約せず、経典の解釈をまったくコントロールしなかったからである。けれども、小乗教団（サンガ）と大乗教団のあり方を踏まえれば、一見散乱したこうしたテキストの形態も、体系的に理解できる。そして、キリスト教や儒教とまったく別種の発想にもとづいた、しかし合理的な思想の体系として、再構成できるだろう。

このことは、仏教を世界思想のなかに、よりよく位置づけるという意味があるばかりではない。仏教からもっとも多く影響された日本文明を、世界思想の文脈のなかでより深く理解するという意味がある。たとえば、日本の神道は、仏教との関係を抜きに語ることができない。神道が仏教と習合したのは、法華経にある本地仏が「垂迹」するという発想を手がかりとしている。また、日本の政治権力と宗教との関係は、インド仏教（を継受した中国仏教）の範型を下敷きにしている。日本の歴史を記述するにも、文学や思想を読解するにも、仏教の徹底した理解が補助線となる。仏教は、日本文明がみずからを言葉で説明する場合の、戦略的な媒介変数なのである。

けれども明治維新を境に、日本人は、仏教に対する切実な関心を失ってしまったようにみえる。神道と仏教を分離した、明治政府の政策の影響もあろう。西欧文明と接触し、西欧の制度や科学技術を範型にすると決めた以上、時代遅れの仏教は邪魔になる。仏教（をはじめとする宗教）は、日本の社会できわめて低い地位しか与えられていない。平川彰博士の業績が仏教界以外の人びとになかなか知られないのも、そのためではないか。

だが、みずからの過去に背を向けるものは、忘れたはずの過去に復讐される。日本が世界に向かって自分を語る言葉を持たないのは、仏教をはじめ、過去の知的な系譜を知らず、理解せず、尊敬しないからではないか。

仏教は、日本人の無意識をとらえている。そして、日本人の思想と行動の、暗黙の価値前提をかたちづくっている。暗黙のままであれば、自分でも説明できない思考や行動の様式にとらわれたままで、国際社会に奇異の念を与えるばかりだ。仏教を、世界思想の普遍言語に置きなおし、それによってみずからを説明する。そうした努力の最善の出発点を、私は平川彰博士の業績のなかにみるのである。■

はしづめ・だいさぶろう▼東京工業大学教授。社会学者。

2002年（平成14年）11月5日　火曜日　朝日新聞

吉本隆明氏をめぐるシンポ

「ご意見番」は真ポストモダン？

評論家・吉本隆明氏の〝ご意見番〟的な活躍が続いている。77歳。なぜ今さら？　そんな声も聞こえる中、新説が現れた。「吉本氏は『真の』ポストモダニスト」。あるいは、そうなりうる可能性を持っていた――。東京・大岡山の東工大で先月開かれた「吉本隆明をめぐるシンポジウム」は、約300人の聴衆を沸かせた。

社会学者の橋爪大三郎氏を司会に、戦後思想に大きな力をもった吉本氏を解剖しようとの試み。文芸評論家の加藤典洋氏、哲学者の竹田青嗣氏、社会学者の大澤真幸氏がパネリストとして参加した。

「新説」を出したのは大澤氏だ。ポストモダンといえば、日本では80年代のニューアカデミズムが象徴的だったが、大澤氏いわく、実態はモダン＝近代の「シニカル」な変形にすぎなかった。むしろ彼らから批判の対象にされた吉本氏こそ、近代に代わる価値体系を作るべく格闘してきた、という。

吉本隆明氏

例えば「マチウ書試論」（54年）で示された「関係の絶対性」。権力や秩序に加担したり反逆したりする際の正しさの基準は、立場や倫理でなく、人と人の間の、どうにもならない現実の関係で決まる。そう主張した前提には、相対化の果てに絶対的な基準をなくした近代への疑問があった、と今では考えられる。一方、『共同幻想論』（68年）では、個人幻想と共同幻想の間に「対幻想」という第3の概念を作り、二元論できた近代を突き破ろうとした。

消費社会論を経て90年代末の『アフリカ的段階について』。ヘーゲルにもマルクスにもない「アフリカ的」という概念を打ち出し、文明史的に無視されてきた人間の精神史の原形を問いかけた。「天下の奇書」。でも、モダン（近代）を乗り越えるための超越的な基準を探った姿勢が、貫かれている」と大澤氏。

全共闘の精神的支柱とされた吉本思想は、とかく狭い左翼運動の中で位置づけられがちだった。しかし一見ばらばらな「点」は、近代という枠組みを問う「線」となって像を結ぶ。吉本氏の全盛期を知る他のパネリストらより一回り若い大澤氏ならではの視線だろう。「かなりおもしろい」（橋爪氏）、「納得できる」（竹田氏）と同意する意見が多かった。

シンポでは、国家解体論をはじめとする吉本氏の主張は役割を終えたといった意見も出た。それでも「人は間違いうる」という敗戦体験を出発点に、独自の原理を確立しようと今なお走り続ける吉本氏の姿勢に、参加者は大きな敬意を示した。「輸入学問」から脱皮しえていないと自認するアカデミズム。吉本氏が過去の人になっていない理由を垣間見た気がした。

（藤生京子）

単眼複眼

2002-2-⑤

新世紀図書館

著者からのメッセージ

「その先の日本国へ」（勁草書房）

憲法と安保、ツインタワー崩壊 思考停止空間に補助線を引く

橋爪大三郎さん

三島由紀夫が東大全共闘と討論をしたとき、橋爪大三郎氏は一学生として会場にいた。それから十余年を経た80年代初めに橋爪氏はこう記した。

〈三島も全共闘も、ともに、戦後民主制のいわば〈外〉に出ることをめざした。それは、戦後民主制の正統性を否認しようとし、そのためには暴力も辞さないという自己主張によって、際立つかにみえる。〉

90年には次のように書いた。

〈陳腐で凡庸で過酷で抑圧的な民主主義は人類が生み出した最高の政治制度である。……年若い私のような学生は、民主主義などというものをふりかざす「知識人」たちの口吻に、欺瞞のにおいをかぎつけて、そんなものは犬に喰われろと思っていた。……そういう当時から考えると、私はなんと遠くへ来たことだろう。〉

そして、今、9・11の同時多発テロによる世界貿易センターのツインタワーの崩壊に触れてこう書く。

〈この日を境に、世界は変わってしまった。……戦後日本を支えてきたツインタワーも、同時に崩れ落ちたのだ。日本国憲法と日米安保条約の、ツインタワーである。〉

欧米ではベビーブーマー世代が政治の表舞台に出て、ヨーロッパでは社民政権の中枢を担っている。それに比して、日本では団塊の世代の落ち込み、全共闘世代の保守化が指摘される。橋爪氏自身も、「右翼化したと言われる」と苦笑する。

確かにこの1、2年をとっても、氏は、「天皇に戦争責任はない」「小泉首相の靖国参拝は合憲である」と発言している。

インタビューでもこう語った。

「福田さん（官房長官）が、非核は思考の型も変わる必要がある。核保有は賢明ではないと思うが、一つの選択肢として考慮されていることは大切です」

幾何学で思考が暗礁に乗り上げたとき、1本の補助線を引くと、見えなかった関係が見えてくることがある。氏は本書のタイトルで補助線をイメージしたという。

〈天皇に戦争責任はない〉という補助線で見えてくるものは――日本国家に戦争責任はある。その責任を、法的責任の無かった天皇に押し付け、国民に戦争責任があると言う度胸もなければ、そう考えるロジックもない、近代国家の国民としては許されないいい加減さである。

〈「首相参拝」は合憲である〉という補助線で見えてくるものは――靖国神社は日本国と無関係な宗教団体であり、個人の信仰の自由な表明（参拝）を妨げることは許されない。A級戦犯の合祀については、どの死者の霊を祀るかは宗教法人靖国神社が決めることで、国家は関与できない、という政教分離の原則である。

橋爪氏の論旨は明晰である。ときに形式論に傾きすぎているように見えることがあるほどだ。

9・11後の世界と日本について、氏は以下のように論じる。

日本国憲法と日米安保条約のツインタワーは冷戦時代にはうまく機能していた。正規軍による戦争を前提にしていたから、「片務的」条約（日本は憲法九条の制約でアメリカを助太刀できない）でもよかった。平和憲法が軍事同盟で支えられていたのだ。

しかし、アメリカが国際テロリストの攻撃を受けた場合、アメリカの助太刀をしないのはテロリストの肩をもっていると、とられる。日米安保条約の前提（日本は集団的自衛権を発動しない）にこだわっているわけにはいかない。成立した「テロ特別措置法」は、集団的自衛権の発動であり、ここに戦後日本を支えてきた日本国憲法と日米安保条約のツインタワーも崩れ落ちた。

アメリカの反撃もテロではないかという「テロ相対主義」については、「殺し方の違い」で反論する。害悪の軽いほうから言うと、過失致死、傷害致死、正当防衛、緊急避難、戦争、処刑、自殺、殺人、そしてテロとなるのであり、〈テロによって攻撃された側が、戦争（より害悪の少ない殺し方）に訴えるのは、正当なことなのだ。〉

三原則を将来見直すこともあり得る、と言ったことはとても正しい」

〈保守―革新〉の枠組みの中の発言ではなく、枠組み自身を問う発言ととらえるべきだろう。

「戦後日本の文体で考えている限り、思考停止命題がある。〈非核三原則〉とか、〈唯一の被爆国〉とか。しかし、時代が変わるとき冷戦時代にアメリカがテロリストを育てたのではないか、という疑問に対しては、〈冷戦が終わるとともに、国際社会のルールが変わったのだから、アメリカが国際テロリズムを非難することに矛盾はない〉。

氏は、さらに論を進める。

〈ポスト冷戦時代の脅威は、軍事的な冒険主義の国にせよ、国際テロリストにせよ、冷戦時代と同じではない。だから日本が、核や、通常兵器や、生物兵器や化学兵器で攻撃される危険が、現実に存在すると考えるべきである。〉

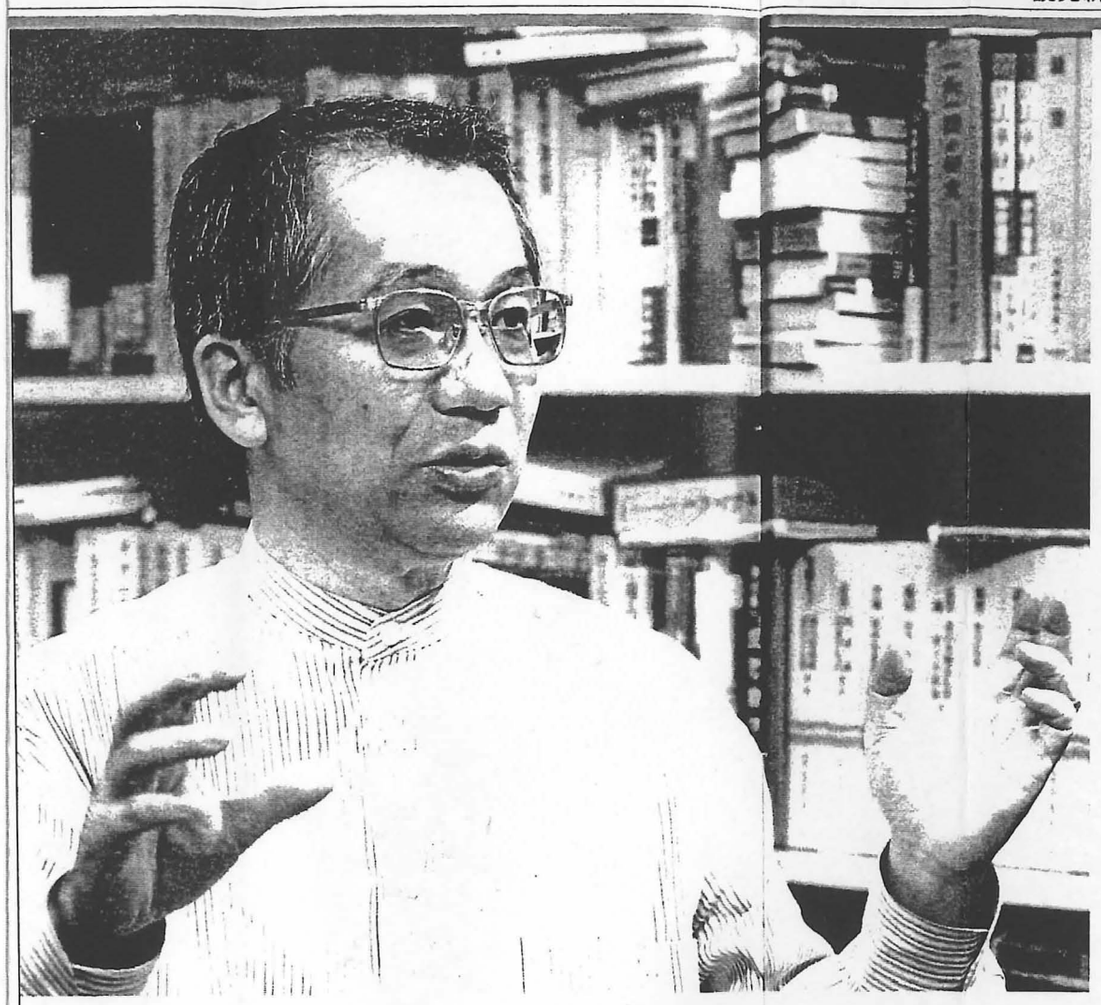
そして結論。

〈日本国憲法（の第九条）と日米安保条約は、その役割を終えた。両方とも改正して、ポスト冷戦の時代にふさわしいものに、つくり変えるべきだ〉と。

しかし、氏は、ここで急にブレーキを踏む。

〈ただ、本書で言いたいのは、そのことではない。われわれが日本の社会をみつめ、国際社会をみつめる認識の根本を、改めることのほうが先決である。そういう努力なしに、いきなり憲法や安全保障の話に入るのは、むしろ危ういと〉。

その先の橋爪大三郎氏に注目しよう。



はしづめ・だいさぶろう 1948年、神奈川県生まれ。東京大学大学院社会学研究科博士課程修了。現在、東京工業大学大学院社会理工学研究科価値システム専攻教授。社会学者。著書は『こんなに困った北朝鮮』『天皇の戦争責任』（共著）、『世界がわかる宗教社会学入門』『政治の教室』など多数。

インタビュー・構成 高橋 誠
撮影 吉川 努

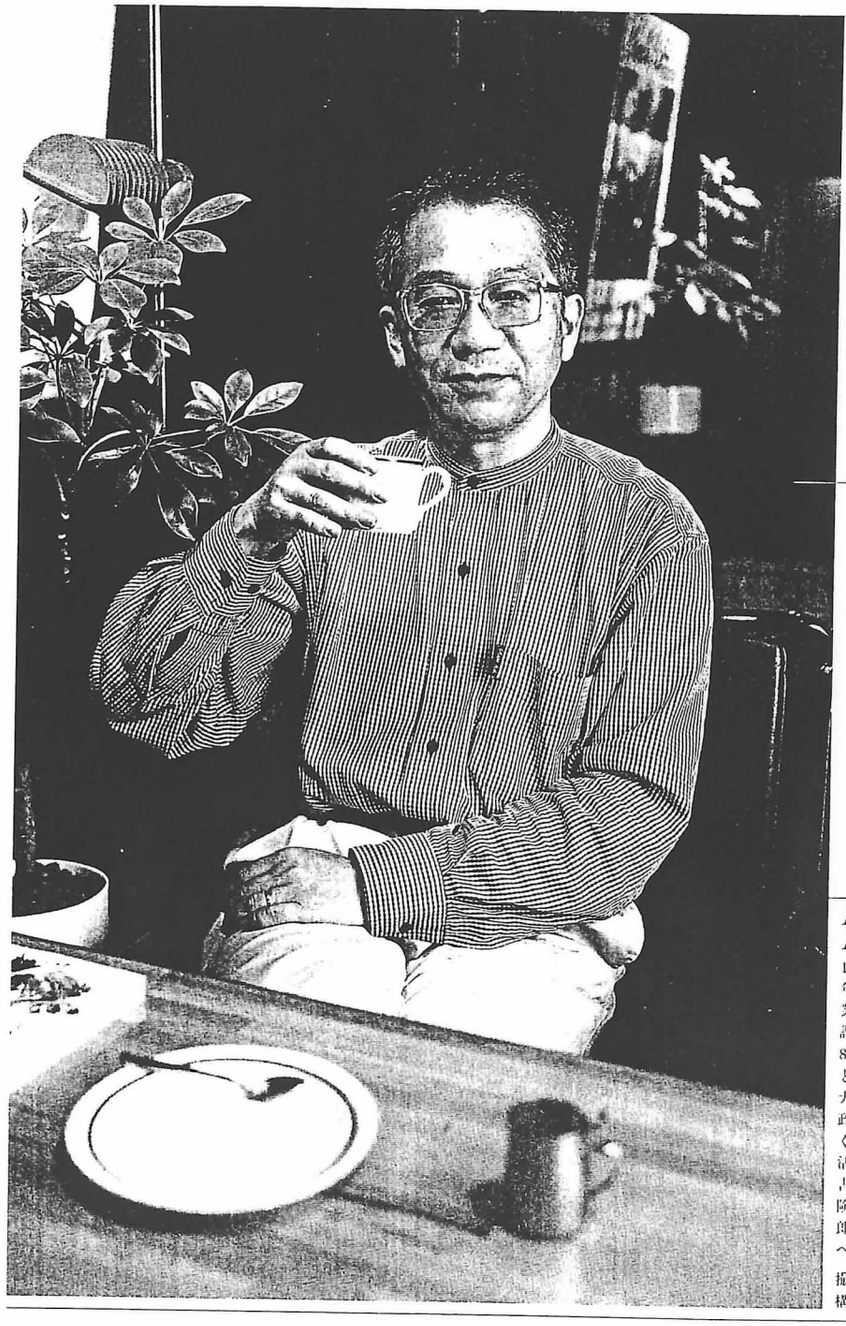
2002-2-⑥

『PRESIDENT』 第40巻第22号 p127-129 プレジデント社 2002.12.2発行

My Precious Time 人に教えたくない店 第257回

橋爪大三郎さん

学生時代に夢中になったジャズの魅力。自由な表現に憧れました



Daisaburo Hashizume

1948年、神奈川県生まれ。72年、東京大学文学部社会学科卒業後、同大学院に進み、博士課程修了。執筆活動を続けた後、89年より東京工業大学助教授となる。現在は、東京工業大学大学院社会理工学研究科教授。政治、宗教や国際問題にも幅広く通じ、各新聞、雑誌での執筆活動も精力的にこなす。主な著書は『はじめての構造主義』『冒険としての社会科学』『橋爪大三郎の社会学講義』『その先の日本へ』ほか多数。

撮影／佐藤直也
構成／斉藤由利子

学生時代

シーズン

四谷にはこの店がある、と思うだけで安心できます

ジャズ喫茶

変いう訪れても、何一つ変わらぬ当時のまま。ジャズに酔わされる四谷心理のよりどころ。

私の学生時代は、ベルクスはまだ新宿にあった。ジャズ喫茶の名店、DIGは、ジャズを聴いて、ジャズを吸って、ジャズを飲んで、ジャズを食べて、ジャズを語って、ジャズを踊って、ジャズを演奏して、ジャズを恋して、ジャズを失恋して、友人と議論して、ジャズを聴いて、ジャズを聴いて、ジャズを聴いて